カントの「感性」についての教説

——時空論の根底にあるもの——

白　石　裕　巳

序

『純粋理性批判』は，対象に関する理論的認識の在り方について，理性の働きと権能とを解明すべきものとして構想されたものである。ここに取り扱われる理性の働きは，一般論理学におけるような対象との関係から独立に考究されるものではなく，徹頭徹尾，対象と関係すべき限りでの理性の働きであり，「超越論的論理学」は認識の対象へのア・プリオリな関係という点に定位して展開されて行く。即ち，「超越論的分析論」においては，この理性の働きは対象についての判断の能力としての「悟性」の綜合の機能として主題化され，「超越論的弁証論」では，対象への関係を欠いた「全く孤立化した理性認識」(B XIV)[1] の仮象性が論難されるのである。

ところで；カントはこの認識の対象への関係を第一義的には「感性」に求めている。その意味で，「感性」についての論述は『批判』全体の礎石を成すものであり，その理解の如何によって，カントの理論哲学に対する解釈は大きく左右されるといえよう。本稿は，従来「悟性」や「理性」の影に隠れがちであったこの「感性」の役割に光を当て，その姿を鮮明にすると共に，カントの超越論的哲学の依って立つ地平を幾らかなりとも明らかにすることを意図するものである。その際予め留意するべきことは，「感性」が単に一枚岩的な礎石ではなく，それと対比される「悟性」の様々な性格づけに応じて多面的な在り方を示している点である。それ故，カントの「感性」という概念を理解するためには，それが主題的に論じられている「超越論的感性論」にのみ固執することなく，寧ろその「感性論」から「分析論」にかけての動的発展においてこれを把握して行かねばならないであろう。

従って以下の考察では，先ず，「感性」と「悟性」の区別についてカントの与えて

いる諸規定を概観することを通して，「感性」という概念の有する多義性を示し，次に，その「感性」についての様々の言説を検討しつつ，その内面的連関を追って，カントの思索動向の原理的様相を明らかにして行きたいと思う。

I　感性と悟性

カントは『批判』の緒言の末尾において，人間的認識の二つの幹として，「感性」(Sinnlichkeit) と「悟性」(Verstand) を挙げて，「前者によって我々に対象が与えられ，一方後者によって対象が思惟される」(A15＝B29) と述べている。「対象が与えられる」ということは，認識主体に対して対象の現存在が示されることに他ならない。感性と悟性のこの認識源泉上の区別は，それぞれ存在と思惟に関するものとして，哲学の伝統的な対立概念に根ざしているものである。そしてカントは，対象の存在に関わる感性の条件が悟性の条件に先行することを確言し (A16＝B30)，思惟は飽くまで与えられうる存在者についての思惟でなければ認識とはならないことを強調している。「内容なき思想は空虚である」(A51＝B75) という著名な言葉は，まさに『批判』の精神を伝えるものであり，存在者に関する感性の条件こそは，思惟或いは認識の有意味性の条件として看過されえないものと言えよう。

一方，感性と悟性は，認識能力ないし表象能力としては，それぞれ「直観」と「概念」の能力とされる。直観は対象に直接に関わる表象であり，概念は間接的に関わるに過ぎない (A68＝B93)，がしかしまた，直観は対象に一対一に対応する個別的表象に過ぎず，概念は判断において用いられることによって，多なるものに妥当する，より高次の表象となる (A69＝B94)。ここにはまた，哲学における伝統的問題である「個別と普遍」，「多と一」の対立概念が頭をもたげている。しかしながら，この局面においてカントは，先の場合とは逆に悟性優位の方向でこの対立を止揚して行く。かの有名な「概念なき直観は盲目である」(A51＝B75) という言葉もまた，そのテーゼを言い表わすものといえるだろう。しかしそれは単に普遍 (概念) が個別 (直観) を包摂するという一面的な仕方で解決されるのではない。カントは，先ず，直観と概念とに類似の構造を見出す。直観は，自らの内に (in sich)，その表象内容である「多様」(das Mannigfaltige) を含むものであり，一方，概念は，自らの下に (unter sich)，多様な諸々の表象を含んでいる，即ち，一なる表象が多なる表象を包摂している

(B40)。ここでそれらの差異ではなく類似性に着目すると，直観も概念（或いは，対象についての概念的把握としての判断）も多様を秩序づけることによって存立している点では同様である。そこでカントは，直観の成立と判断の成立において，それぞれ悟性の同一の「綜合」(Synthesis)[2] の機能が働いており，それがそれらの多様を秩序づけそれらに「統一」(Einheit) を与えると考えたのである（A79＝B 104 f.)。そして，悟性のその綜合的統一の諸機能と考えられたものが諸々のカテゴリーの働きに他ならない。カテゴリーは，先ず，判断の成立に関するその論理的機能として導き出され，次に「超越論的演繹」において，その直観との関係が考察される。即ち，直観の成立に関して，「直観の統一」は如何にして可能であるのかが論及されるのである（B144 Anm.)[3]。ここでは，カントが「直観する」ということを一つの認識行為として捉えている点が重視されねばならない。直観を成立させること，即ち直観の「多様」に「綜合的統一」を与えることは，感性にではなく悟性に起因するものと見做されている。そこで，感性の条件が認識の有意味性の条件であるとするならば，一方の悟性の条件は，さしあたって認識行為における認識の主体性の条件と言いうるであろう。

上述のことからも明らかなように，認識能力としての感性と悟性とを単に直観の能力と概念の能力として性格づけることは，導入的意味合いを持つとはいえその本質的役割を顕にすることにはならない。カントは，感性と悟性の本質規定にあたって，それぞれ「受容性」(Rezeptivität) と「自発性」(Spontaneität) という言表を用いる。先ず「受容性」について見るならば，カントは「我々が対象によって触発される仕方によって表象を得る資質（受容性）は感性と呼ばれる」（A19＝B33，傍点はカント）と述べている。受容性としての感性は，能動的に直観する行為的能力（Vermögen）としてではなく，認識内容としての直観の多様を「規定可能なもの」(das Bestimmbare) として受容する資質的能力 (Fähigkeit) と見做されねばならないものである[4]。一方「自発性」としての悟性は，他に俟つことなく，従って経験を俟たずにア・プリオリに表象を産出する (hervorbringen) 能力である（A51＝B75)。カントにあっては，経験を根拠としてそれから経験的概念を抽象する働きは，悟性や理性の本質に属するのではなく単にその二次的働きと見做されているに過ぎない。自発性としての悟性の本質は表象を「ア・プリオリに結合する能力」(B135)，或いは能動的に「規定する行為」(B 158 Anm.) に求められる。

ところで，「受容性」と「自発性」はそれぞれ独立なものとして考察される場合，

さしあたっては否定的側面を有していることが知られる。受容性としての感性は「触発」(Affektion) によらなければ何ら表象を得ることはできない。しかも対象による触発，即ち外的触発は経験的な，従ってア・ポステリオリなものと見做される故に，その側面では感性は経験的受動的受容性として性格づけられるであろう。他方，自発性に関して見れば，自発的に，従ってア・プリオリに産出される表象は純粋悟性概念であれ，純粋直観であれ，また単なる構想であれ，とりあえずは一律にその「客観的妥当性」(objektive Gültigkeit) の問題，即ちその表象がそれに妥当する対象を有するか否かの問題を孕んでいる。そこで，単に主観的な表象と客観的な意味（客観的実在性）を持つ表象との区別が示されねばならないが，その区別は原理上，自発性の本質そのものには属さないであろう。我々は或る物が存在するか否かに拘らず何でも思惟し表象することができ，能動的自発性の働きは恣意的でもありうるからである。それ故，この客観的妥当性の問題は，認識と対象との一致としての「真理」の規準の問題（A58＝B82）と一様であり，それは自発性の受容性への根源的関わりを解明することを通してのみ示されうるであろう。

このように「受容性」と「自発性」は，その原像的姿においては，それぞれア・ポステリオリなものとア・プリオリなものの認識源泉を意味するとはいえ[5]，切り離して一本立ちしうるものではない。カントはたびたびその相互補償性を強調している。そしてそのことは，カントの思索がそれらの本質的区別を突き破って内奥へ向かい，「受容性」の内に自発的とも言いうる側面を，また「自発性」の内に受容的とも言いうる側面を探り求めていこうとする動向を物語るものではなかろうか。それは感性のア・プリオリな形式としての「空間・時間」，及び，経験的自己意識としての「内官」についての論述において顕著に現われているように思われる。ここで前もってこれらについて簡単に触れておこう。先ず，「空間・時間」は現象の多様がそれにおいて秩序づけられる「感性の形式」ないしは「直観の形式」とされるが（A20＝B34），「形式」(Form) は「質料」(Materie) を規定する「規定」(Bestimmung) と見做されるものであり（A 266＝B 322），その意味でそれらは感性の規定的受容性としての側面を示唆している。とはいえ，規定する働きは悟性に帰せられるのであり，その連関が明らかにされねばならない。また「内官」は「外官」と共に感性に属するものではあるが，「それを介して心性は自己自身を，即ち自己の内的状態を直観する」（A22＝B 37）と述べられるように，寧ろそれは経験的自己意識を意味する。「内官」は，純粋

自己意識としての「統覚」の能動的な「自発性の行為」(B132) とは区別されるような意識の受容的位相を指し示すものといえよう。そしてそれは，受容されるものを意識するという点では何らかの能動性を持つであろう。後に見るように，カントは受容性の「共観」(Synopsis) の作用に言及しているが (A97)，それは感性の能動的受容性[6]とも言いうるような側面を示唆するものである。

さて以上のように，カントが「感性」について，それと区別されつつ補償関係にある「悟性」と共に，様々な観点から論じていることが確認されるであろう。そこで次に，「悟性」との対比ということを踏まえつつ，カントの「感性」についての諸々の言説を検討し，その意味するところを明らかにしていきたいと思う。

II　対象の現存在に関する条件としての感性

対象が与えられる条件としての感性は，対象によって触発されることによって経験的にまた受動的にその対象の現存在を認識主体に告げ知らせる「受動的受容性」として性格づけられるであろう。そのような感性は如何なる意味でも表象の原因性ではなく，ただ単にその「受動性」のみが注目される。この否定的側面は，しかしながら感性の非悟性的な本質を意味し，認識源泉に関して感性を悟性から峻別する特性でもある。カントは，感性と悟性とを全く別箇独立の認識源泉として区別すること，即ち「感性」を「叡知的なもの」(das Intellektuelle) から峻別することを「超越論的区別」と呼び (A44＝B61)，そしてその区別に基づいて，感性の対象としての「現象」(Erscheinung) が「物自体」(Ding an sich) から区別されねばならないと説くのである。

カントは自らの立場である「超越論的区別」を他の二つの立場と比較して鮮明にしている。第一に，カントがライプニッツ=ヴォルフに帰する「論理的区別」(A44＝B61) においては，感性によって表象される現象はただ物自体が非判明的に (undeutlich) 表象されたものであり (ibid.)，悟性は感性が混入した副次的表象を分離して，物自体を判明的に (deutlich) 表象する能力であるとされる (A271＝B327)。しかしながらこの区別においては，感性は悟性と別箇の認識源泉と見做されている訳ではなく，単にその低級な「混乱した表象の仕方」(eine verworrene Vorstellungsart) とされるに過ぎない (A270＝B326)。そうしてカントはこの立場が現象を「知性化す

る」(intellektuieren) と難じ，感性に表象される現象は例え非判明的にも物自体を表象したものと見做されてはならないとし（A 271＝B 327)，感性を能動的表象能力と考えてはならないことを明示するのである。第二に，カントがロックに帰していると見られる[7]「経験的区別」（A45＝B62) においては，感性はその個人差，或いは主観的状況に応じて現象を表象するが，悟性はそれらの経験的表象から抽象によって全ての人の感官に共通するような物自体についての認識，即ちその経験的概念を得るとされる (ibid.)。しかしながらこの区別においては，悟性は単に経験的概念を抽象する能力として感性に依拠するものとなってしまう。カントは，この立場は悟性概念を「感性化する」(sensifizieren) として斥ける（A 271＝B327)。そうして，例えば，虹は或る人にとっての現象であり，全ての人にとっての事物自体と見做せるものは雨滴であるとするこの経験的区別は，単に物理的区別に過ぎず，虹も雨滴も総じて感性の表象としては現象にすぎないとされるのである（A45＝B63)。

これに対してカントの「超越論的区別」が示すことは，感性は自発的に直観を産出するような能動的直観能力と見做されてはならず，能動的自発性としての悟性から，全く別種の認識源泉として，つまり受動的受容性として区別されねばならないということである。カントが「感性的」(sinnlich) という形容で意味せしめている内実は，能動的自発的に表象を存在せしめる表象能力と対比される，感性のそのような非自発的な性格であり，「これ［＝多様］が自発性なくして心性に与えられる仕方は，この区別の故に感性と呼ばねばならない」（B68) のである。そうして，感性的直観は飽くまで非自発的に「客観の現存在に依拠して」（B72) のみ生ずるとされる。ここでは，表象するという行為が表象の存在を可能にしているのではなく，飽くまで対象の存在が表象の存在を可能にしている点が銘記されねばならない。そのようにその表象の原因性が主体自身に存せず，認識において我々が受動的在り方をしている限りにおいて可知的となる物が，カントの意味での「現象」である。それはその存在根拠を主観の認識活動領域の外に有する物である。カントが「現象は我々の内なる表象に過ぎない」と述べる場合，それは，「現象」の存在根拠（即ち存在論的に見た限りでの表象的存在を可能にする対象的存在自体）は超越論的な意味で「我々の外」[8]に有る，と言うのと同様である。カントの図式に従って言うならば，感性的直観の原因性は我々の外なる物自体に仮説されるその自発性であり，その触発に対して感性は徹頭徹尾受動的受容性として性格づけられねばならない。我々認識主観はそのような感性を介し

て，触発の事実によって単に対象の現存在を受動的経験的に知るのであって，感性は物自体について何ら表象内容を能動的に獲得するのではない。そしてまた悟性も，対象の現存在を自発的に，従ってア・プリオリに表象し認識することはできない。畢竟するに，表象自体は「その対象を現存在に関しては産出しはしない」（A92＝B 125, 傍点はカント）ことは勿論のことであり，対象が与えられること，つまり対象の現存在に関するこの経験的受動的受容性としての感性は，悟性の主体性の条件と，厳然と区別されるべき本来の有意味性の条件であると言えよう。非自発的に与えられうるが故に，我々の内なる感性的表象（現象）はかえって何らかの外なる存在者（物自体）に対応しているものと判定されうるのである。

ところで，「現象」が我々の内なる「表象」に過ぎないという主張は，カントの（広義の意味での）「超越論的観念論」（der transzendentale Idealismus）の立場を意味する。では，そのように主観的表象に過ぎない「現象」は如何なる意味で同時に「対象」と言われうるのであろうか。この点について次に，規定的受容性と見做される限りでの感性，即ち「空間・時間」をその形式として持つ，認識論的に考察される感性について見て行くことにしたい。ただしここで予め留意すべきことは，受動的受容性としての感性を根拠としてカントが主張する現象の超越論的観念性と，規定的受容性としての感性の形式と見られる空間・時間の超越論的観念性の主張とは，重なりつつも恐らくは異なる意味を持つであろうという点である。

Ⅲ　感性の形式としての空間・時間

直観を受容する資質としての感性は，直観の多様を自らの内に含み秩序づける形式を持つものとして「規定的受容性」を意味する。カントはこの感性の形式として「空間・時間」を挙げるが，それらについて二重の性格づけを為している。第一に，空間・時間は我々の感性にア・プリオリに既在する「直観の形式」である（A20＝B34）。それらは，経験的直観においてア・ポステリオリに与えられる現象の多様を秩序づけている点で，現象の形式と呼ばれ（ibid.），現象（経験的直観の対象）を可能にする認識主体の側の主観的条件とされる。そうしてカントは，空間・時間的規定が現象に対しては必然的に妥当するとして，空間・時間の「経験的実在性」（die empirische Realität）を主張する（A28＝B44, A35＝B52）。第二に，空間―時間の表象はア・

プリオリに心性の内に生ずる（個別的な）「純粋直観」である（A20f.＝B35)。それ故また，個々の空間―時間の表象を可能にする（感性の形式そのものとしての）空間・時間は根源的な純粋直観とされる。そしてカントは，ア・プリオリに産出される純粋直観としての空間・時間については，その客観的妥当性の問題に関して，それらが物自体の規定ではないことを特に強調する（A28＝B44，A36＝B52)。それが空間・時間の「超越論的観念性」の持つ意味であり，さしあたってはその否定的側面であると言えるだろう。

「感性論」において述べられるこのような言説の中心思想は，カントが空間・時間を対象の側にではなく，我々認識主体の側の感性のア・プリオリな形式とした点，即ち直観に関する「コペルニクス的転回」にあると言えよう（B XVI f.)。それはまた，受動的受容性から規定的受容性への転換としても示されるものである。受動的受容性と見做される限りでの感性を介して与えられる「現象」は，「我々の内なる表象」として総じて主観的なものに過ぎない。そのような「現象」において客観的なるものが如何にして主観的なるものから区別されるのか，「現象」は如何なる意味において客観性を帯び対象と見做されうるのか，と問わねばならない。これに対するカントの解答は，感性が単に受動的受容性としてのみならず規定的受容性としてその形式を持つこと，即ち，全ての人に共通で同一の直観の仕方とされる「直観の形式」が存し，それが間主観的な意味で「現象」に客観性を付与するということにある[9]。カントが「感性の形式」及び「直観の形式」に，しばしば「我々の」或いは「ア・プリオリな」という形容を冠するのは，それらが現象に関する間主観的客観性の地平であることを示さんがためである。

受動的受容性として性格づけられる感性による感性的認識は，触発されるがままに受動的に対象と一対一に対応するような認識であり，その対応は偶然的であって，そのような認識は主観的妥当性しか持たないであろう。それは，我々が自らの自発性を行使せずに対象に付き従って単に経験的に認識する位相を意味するものである。付言するならば，カントは，そのような非主体的認識の在り方に留まる限り，認識は相互の一致を欠き間主観的真理は成立しないと考えたと言えよう。しかしまた対象がそのように受動的感性的に，従ってまた単に主観的に認識されている位相において，その対象は「現象」と呼ばれ「超越論的観念性」を有するものと見做される。それ故，「現象の超越論的観念性」はかえって，現象に間主観的客観性を付与する今一つの認

識の在り方を予想し要請するものであると言えよう。カントは，現象についての経験的直観において，「感覚」とそれを秩序づける「形式」とを区別分離して，後者が「現象の形式」を意味する「直観の形式」であるとする（A20＝B34）が，ここで区別されているのは「感覚」と「直観の形式」というよりも，それらの「現象」に対する関係であり，先に述べた二様の認識の在り方であると言えよう。「感覚」は間主観的妥当性を持つ表象とは見做されず，それ故対象による触発の結果としての（A19f. ＝B34）単に主観的な経験的表象内容とされる。それは受動的感性的な認識の在り方に属するものである。一方「直観の形式」は我々の感性に共通で同一の（ア・プリオリな）直観の仕方と解される限りにおいて，現象に対して間主観的妥当性を持ち，現象に客観性を与える認識主体の側のア・プリオリな条件と見做される。そしてカントがそのような「直観の形式」として求めたものが空間・時間であり，空間・時間の「経験的実在性」の主張は，現象の「超越論的観念性」の主張と相互補償的関係にあると言えよう。

しかしながら，件の「直観の形式」が空間・時間と同定されること，換言すれば，空間・時間が認識主体の側の「感性の形式」とされることの理由は，それらが経験的直観を可能にする必然的条件であること[10]によって十分に示されるとは言い難い。今仮に空間・時間の「経験的実在性」の主張を弱い意味に取って，空間的・時間的関係が現象の経験的認識に常に含まれていることと解するならば，その経験的関係が常に対象による触発の結果として常に与えられていると考えることも可能である。もしそうであるならば，ア・プリオリな「直観の形式」と目されるものは存しないか，或いは空間・時間以外に求められねばならないであろう。

これに対して，カントが空間・時間を感性の形式と見做す積極的理由は，現象の空間的・時間的関係が，心性の内にア・プリオリに生ずる個別的な「直観そのもの」としてア・プリオリに規定可能であることに存する。対象による触発なくして生ずるそのような「純粋直観」が可能であるためには，先ず感性が自らの内に根源的な純粋直観[11]としての空間・時間を有しており，それが悟性によってア・プリオリに規定されると考えられねばならない。逆にまたカントは，現象の空間的・時間的規定が（個別的な）純粋直観としてア・プリオリに規定されえないとするならば，例えば空間に関する幾何学における必当然的命題の持つ必然性が説明されえないとする（B40 f.）[12]。つまり，もし現象の空間的規定が対象による触発の結果として単に経験的に与えられ

る表象であるとするならば，そのような経験的空間表象からは幾何学の命題の持つ必然性は帰結しえない故に，空間的規定はア・プリオリに与えられるのでなければならないのである。

以上のことから，経験的な意味で現象の関係性を規定する「直観の形式」としての空間・時間は，またア・プリオリに規定可能な「純粋直観」である限りにおいて，対象の側にではなく認識主体の側にその座をもつ「感性の形式」と見做されうることが明らかとなる。そしてここに，空間・時間の「超越論的観念性」の肯定的側面が見出される。空間・時間は感性の形式そのものである根源的純粋直観として観念性を有し，またそれが故に現象に関するア・プリオリな規定可能性の地平となるのである。空間・時間は「直観の形式」としては現象の多様を秩序づける関係性を意味するに過ぎない。「しかし，空間と時間は単なる直観の形式としてばかりでなく，（多様を含む）直観それ自身として，かくしてまた，それらの内なる多様の統一の規定を伴ってア・プリオリに表象される」（B160，傍点はカント），とカントは論ずる。カントは現象における空間的・時間的関係が表象されるためには，それが純粋直観としてア・プリオリに規定されねばならないと考える。そして純粋直観に表象としての統一を与えるア・プリオリな規定作用はカテゴリーの綜合的統一の機能である。かくしてカテゴリーは空間・時間の直観性を介して間接的に現象の関係性を規定するものと見做されるのである。

Ⅳ　感官の共観作用

第一版の「超越論的演繹論」においてカントは，受容性に属する「感官による多様の共観」（A97）が，自発性に属するその多様の「三重の綜合」（ibid.）に対応することから，その論述を開始している。そしてこの三重の綜合は「内官」に多様が与えられていることを前提として論じられる。ここに「内官」はカントにあっては，経験的意識の能力に当たるものであり，内官に多様が与えられているとは，多様が経験的に意識されていることに他ならない。ただし，その意識は多様と一対一に対応しているだけであり，多様な経験的意識はそれ自体としては個々ばらばらなものである。「直観の多様」の成立は内官の形式としての時間における区別として説明されるが（A99），それは同時に，経験的意識が既に時間中にあり，時間的に見てそれらは端的に多なる

意識であることを意味しよう。そうして内官は意識の能力としてはせいぜい「経験的統覚」に過ぎず（A107），多様の綜合における意識の自己同一性の根拠とされる「超越論的統覚」はより根源的に求められる。しかし今はこれについて論じている暇はない。内官の，少なくとも「統覚的」と見做されるその積極的側面が見出されねばならない。それは，内官が多様を端的に多なるものとして受け取り保持していること，即ちその「共観」の作用に見て取れるであろう。それは感性の能動的受容性とも言いうる側面である。

カントは先ず，直観における「覚知の綜合」(die Synthesis der Apprehension) を「(いわば空間の表象におけるように) 第一に多様性を通り抜けること，そして次にそれを一括して取り込むこと」(A99) と説明する。「覚知」とは本来，多様を認識の自発的活動圏内へと取り込む (aufnehmen) ことを意味する。しかしそれは受容性に多様が既に与えられていることを前提とするであろう。そこで「通り抜けること」(das Durchlaufen) は，内官の形式としての時間に従って意識の多様性が区別され，多様が初めて成立する局面を言うものであると考えられる。その意味で本来の覚知の働きとしての「一括して取り込むこと」(die Zusammennehmung) はそれに先行しえない。ところで例えば，A－B－Cという多様が順に時間において区別され，CがBから区別される時点に到ったとするならば，その時，A－Bは最早，経験的には意識されておらず，よって次の Zusammennehmung においては，A－Bが再生されなければ直観は可能ではない。この点でカントは，直観における「覚知の綜合」が構想における「再生の綜合」(die Synthesis der Reproduktion) と不可分であると論ずるのである（A102)。

しかしながら，A－Bが再生され直観に取り込まれるためには，それらは何処かに保持されていなければならないであろう。それは内官においてである他はない。そして「共観」(Synopsis) は，そのような内官による多様の把持作用を意味すると考えられる。ただし，内官による共観は多様を端的に多なるものとして把持するものである。ここで重要な点は，共観されている多様は，内官の形式としての時間に従って区別された意識の多様性に対応しているだけで，それは未だ客観的時間規定を伴っていない点にある。先の例で言うならば，Cの時点において，AとBの多様は内官においてただ区別されて把持されているに過ぎず，その順序は無規定であり，さらには区別の回数ですら量的に規定されていないと見做されねばならない。カントが先の引用で

特に「空間の表象」との類比に注意を促しているのも，そのような時間的無規定性を示唆するものであろう。かくして，空間中の多様のように，それは再生的構想力によって任意に再生されうる。例えば順序に関しては，A—Bとも，B—Aとも再生可能であり，量に関しては，AとBの二単位としても，ABと一単位としても再生可能である。そして，内官に多様が客観的時間規定を伴わずに把持されているが故に，この位相において再生的構想力は連想の法則に従って単なる構想を形成することもできるのである。

これに対して，客観的時間規定を与えるものは，概念における「再認の綜合」(die Synthesis der Recognition) である。概念は多様の再生の「規則」(Regel) を含むのであり，再び先の例で示すならば，Bが与えられた時点で，Bに順序に関して先行するべきものがあらねばならず，Bに量に関して一単位として区別されるべきものがあらねばならないとすれば，A—Bと規定されるであろう。更にそれはCが与えられた時点で同様に繰り返されるであろう。そのように内官の形式的側面である時間を，経験に先立ってア・プリオリに規定し，直観の客観的統一を成立せしめるものが，カテゴリーの機能に他ならない。

ところで，内官の意識は先に述べたように時間中にある個々ばらばらな経験的自己意識であり，「変遷的」(wandelbar) (A 107) である。しかしながら，内官による多様の把持作用と考えられる共観の働きは，時間の流れに抗する非時間的なものである。つまり内官の共観は，寧ろ空間的なものを背後に有し何らかの意味で外官と連関していることが予想される。カントもまたこれを単に「感官」による共観と呼んで (A94 Anm., A97)，そこに内官と外官との関わりを暗黙の前提としているようである。この内官と外官及び統覚との三者の関係について，カントはそれを自己認識の問題として『批判』の第二版に到ってより自覚的に取り上げ，「内的触発」の理説や「内的経験と外的経験との関係」の思索等々を展開するのであるが，今はそれについて論じている余裕はない。

さて，カントの「感性」についての教説を振り返って見るならば，それは，認識の対象への関係の条件を認識主体の側へ引き寄せ，内面化して行く過程であったと言えよう。初めは触発というただ一つの接点において繋がっていたこの関係は，ア・プリオリな感性の形式において一挙に認識主体の側へと内化され，最後にはあらゆる現象

が内官に属するに到ったのである。そしてこの豊穣な有意味性の土壌を得た悟性は，内官の形式としての時間を僚友として今や思うさま主体性を発揮してその開墾に取り組むことができるのである。

註

(1) 慣例に従って『純粋理性批判』の第一版をA，第二版をB，『プロレゴメナ』はアカデミー版の巻数のⅣとし，これに頁数を付し，引用箇所・参照箇所を示した。

(2) 「綜合」は厳密には「構想力」(Einbildungskraft) の働きに帰せられる（A78＝B103)。一方悟性の働きは多様の綜合を統覚の統一へともたらすことに存する。カントは悟性によるこの多様の綜合的統一の働きを「結合」(Verbindung) と呼ぶ（B130 f.)。

(3) 直観が既に表象としての「統一」を有しているならば，前もってその多様な所与が「綜合」されて直観の多様として含まれたと見做されねばならない。そしてそれはまた多様な所与に伴っていた多様な意識が統覚の「統一」に帰属したことを意味する。そして多様な所与の綜合を統覚の統一にもたらす働きがカテゴリーの機能とされる。

(4) カントは，感性を「直観能力」(Anschauungsvermögen) と呼ばない訳ではないが，特に自発性との区別が必要な箇所では Fähigkeit 及び Vorstellungsfähigkeit という語句を用いる傾向にある。例えば，同所の他に，A19＝B34，B72，B150。

(5) 受容性と自発性との区別は，元来我々の認識の二様の在り方，即ち経験認識と理性認識の区別にその原形を求められよう。受容性と自発性の否定的側面は，経験認識と理性認識が互いに孤立化された場合の欠点を本性的に示したものと言える。そのことでもってカントはかえってそれらが内的関係を持たねばならぬことを逆照射するのである。

(6) 他に適当な言葉が見当たらなかったので「能動的」という形容を用いた。内官は本来自発性として性格づけられるべき意識の受容的側面を示すとも言える。その点では内官は与えられる多様を意識する受動的自発性と性格づけられよう。

(7) 「経験的区別」の語られる箇所にロックの名は見当たらないが，同様の内容に言及する「反省概念の多義性」の章にその名が見出せる。

(8) カントは，A373 において，außer uns という表現に関して，経験的な意味と超越論的意味を区別すべきことを指摘している。

(9) 『プロレゴメナ』においてカントは間主観性を意味する「(全ての人にとって

の）必然的普遍妥当性」（die notwendige Allgemeingültigkeit（für jedermann））と「客観的妥当性」とが交換概念であるとしている（Ⅳ298）。カントは認識の「客観性」の本質を，認識と対象が単に一対一に対応する点には求めず，その間主観性に見て取り，その根拠を認識主体に共通するア・プリオリな条件に求める。また間主観性の根拠を一方的に認識主体の側にのみ求めた理由は，カントがここで認識の対象を「現象」と見做したからに他ならない。

(10) これは空間・時間についてのそれぞれの「形而上学的解明」（metaphysische Erörterung）の前半部の論ずる点である。

(11) これは「形而上学的解明」の後半部の論ずる点である。付言するならば，カントは感性の内なる根源的空間・時間が我々に共通の唯一の在り方をしていること，そして個別的な空間・時間の表象はその一つの直観としての空間・時間を制限することによってのみ可能であること（A25＝B39，A32＝B48）に，空間・時間の表象の有する間主観性を見て取っていると言えよう。

(12) これは空間の「超越論的解明」（transzendentale Erörterung）の論ずる点である。しかしながらカントは幾何学が現象に適用可能であることを既に事実と見做しており，その解明は幾何学の成立を説明する可能性の一つを示すものでしかないであろう。

〔哲学　博士課程〕

Kants Lehre von der Sinnlichkeit

——Worauf die Theorie von Raum und Zeit sich gründet——

Hiromi SHIRAISHI

Diese Abhandlung versucht, die verschiedene Seiten der „Sinnlichkeit“ in „K. d. r. V.“, im Vergleich zum Verstand aufzuklären.

Erstens ist die „Sinnlichkeit“ die Bedingung, unter der uns Gegenstände gegeben werden. Sie wird als „die passive Rezeptivität“ charakterisiert, die uns das Dasein des Gegenstandes zeigt, sofern sie vom Gegenstand affiziert wird. Auf dieser Passivität der Sinnlichkeit beruhen die Unterscheidung der Erscheinung vom Ding an sich und die transzendentale Idealität der Erscheinungen, d. h. daß sie nichts anderes als die Vorstellungen sind.

Zweitens ist die Sinnlichkeit die Anschauungsfähigkeit. Sie wird „die bestimmende Rezeptivität” charakterisiert. Denn sie hat zwei Formen der Anschauung, nämlich Raum und Zeit, die der Erscheinungen, die nur unsere subjektive Vorstellungen sind, die Objektivität geben können, da diese Formen uns gemein sind. Raum und Zeit als die Formen der Anschauung haben zwar die empirische Realität in Ansehung der Erscheinungen, aber sind nur empirisch bestimmend. Sie sind insofern a priori bestimmend, als sie die Anschauung selbst sind, die wir a priori hervorbringen können, und die transzendendentale Idealität haben.

Drittens, wie die Apperzeption als das reine Bewußtsein zur Spontaneität gehört, so gehört der innerliche Sinn als das empirische Bewußtsein zur Rezeptivität. Kant erwähnt hier die Synopsis durch den innerlichen Sinn, womit die Synthesis durch den Verstand korrespondiert. Diese Synopsis deutet die positive Leistung der Sinnlichkeit an, die als „die aktive Rezeptivität” charakterisiert wird.